



Title	「いづれ」の歴史的変遷
Author(s)	松本, 朋子
Citation	日本語・日本文化. 2014, 41, p. 61-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50770
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

「いづれ」¹⁾ の歴史的変遷

松本 朋子

1. はじめに

現代語では、次のように「いづれ」という形式が用いられている。

- (1) a 公開するのはこれが初めてだから、そのうちツールの機能も改善／変更されるんじゃないかしら。いづれにせよとても素敵な機能拡張ね。このツールを使えば、迅速かつ簡単なソーシャルメディアキャンペーンがすぐに可能になるんだもの。(http://web-tan.forum.impressrd.jp/e/2007/10/11/2017)
- b 「彼ら (NTT) は 100 年の歴史があるから、2, 3 年で抜くことは難しいだろう。しかし、我々も短時間でここまで来た。いづれは必ず追い抜けると信じている。

(http://internet.watch.impress.co.jp/cda/news/2005/06/22/8117.html)

「いづれ」は (1) a にあげた「いづれにせよ」などの形で、「少し違いがあっても結局は。 (『日本国語大辞典』)」といった意味の副詞として用いられる。また (1) b のように「いづれ (は) ～するだろう」のような形で、「そう遠くない将来において。近々。(同)」と、将来のことについての見通しを述べる副詞としても用いられる。

古代語に目を向けてみると、「いづれ」は奈良時代から用例が見られ、その後も多く用いられている。

- (2) a 大伴の御津に船乗り漕ぎ出てはいづれの島に (伊都礼乃思麻尔) 廬せむ
我 (万葉集・巻第十五・3593)
- b いづれの御時にか。女御・更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いと、やむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。

(源氏物語・桐壺)

(2) aは『万葉集』の例で、「大伴の御津で船に乗り、一旦こぎ出したなら、その先はどここの島に飯のやどりをすることになるだろう、私は。」という意味になる。

(2) bは、『源氏物語』の冒頭部分「どなたの御代のことであったか……」という例である。どちらも「どこ」「どなた」といった話し手の疑問をあらわす部分で「いづれ」が用いられている。

しかし、現代語では「いづれ」が(2)のように疑問の意味で用いられることはほとんどない。

(3) *いづれの本が面白いですか？

つまり、古代語と現代語とを比較すると、「いづれ」の用法はかなり異なっており、「いづれ」には何らかの変化があったことが明らかである。そこで本稿では古代語の「いづれ」を取り上げ、その歴史的変遷を明らかにすることを目的とする。またその際、他の不定語と「いづれ」の関連についても適宜考察していく。

2. 「いづれ」

2.1 「いづれの○○」

「いづれ」は奈良時代から用例が見られる。

(4) a 荒津の海潮干潮満ち時はあれどいづれの（伊豆礼能）時か我が恋ひざらむ
(万葉集・巻第十七・3891)

b 天地のいづれの（以都例乃）神を祈らばか愛し母にまた言問はむ

(同・巻第二十・4392)

(4) aは「いつの時と決まって、私が恋しく思わない時があるでしょうか」(4) bは「天と地のどちらの神に祈ったらいとしい母にまたことばをかけられようか」という意味になる。『万葉集』には「いづれ」の仮名書き例が5例見られる。また諸本全て「いづれ」と訓じており、「いづれ」と読んだ可能性の高い例も12例見られる。それらは1例をのぞき全て「いづれの○○」と下接する名詞を連体修飾する形で用いられていた。「いづれの○○」の意味は「複数の対象の中に解答があるが、その解答について不明である。」となる。この場合、「いづれの○○」の部分がひとまとまりの代名詞のように用いられ、対象の内容を問うている。そこで、「いづれ」がこのように内容を問う用法を内容用法と呼ぶことにする。「いづれの」が修

飾する名詞は(4)に挙げた「時」「神」のほかに「日」「島」など様々であり、「いづれ」は奈良時代には広い対象についての疑問で用いられていたことが分かる。

2.2 「いづれφ」

平安時代の資料にも「いづれ」は多く見られる。奈良時代には「いづれの○○」という例が多かったが、この時期になると「いづれの○○」とは形の異なる「いづれか」「いづれと」「いづれを」の形式や、「いづれ」に助詞がつかない形などがみられるようになる。以下、これらの形式を「いづれの○○」とは区別するために「いづれφ」と呼び、考察していく。

「いづれφ」は次のように用いられることが多い。

(5) a 童なる、殿上のほども、御覧じ馴れたるもあり。伊豫の介の子もあり。

あまたある中に、いと、けはひあてはかにて、十二三ばかりなるもあり。

「いづれか、いづれ」など、問ひ給ふに、「これは、衛門の督の末の子にて、いとかなくし侍りけるを、幼き程に後れ侍りて、姉なる人のよすがに、かくて侍るなり。

(源氏物語・篝火)

b 「野山の中には、いづれか面白き」仲頼奏す。「近きほどには、嵯峨野、

春日野、山は小倉山、嵐山なむ侍る。(宇津保物語・吹上・1-513)

(5) a は『源氏物語』の例で、大勢いる子供たちを見て、「どれが誰の子かしら」などと尋ねている。(5) b は『宇津保物語』の例で、院の「その野山のなかでは、どこが興味深いであろうか」との問いかけである。(5) a のように、「いづれφ」は、それ自身が選択肢のように用いられ、その選択肢について話し手が「これはこれ」と識別する場合に用いられることが多い。また、(5) b のように「勝る」「劣る」「甲乙」などの語と共に「複数の対象を比較して優劣、真贋などを見極める」といった意味でも用いられる。選択の対象については「A と B とどちらが」と二者を比較する場合もあれば、三者以上の場合もある。このように選択肢についての識別や比較について述べる用法を選択用法²⁾と呼ぼう。

平安時代の和文資料に見られる「いづれの○○」と「いづれφ」の用例数と、用法別の用例数を(表1)に示した。(表1)から「いづれφ」の大半が選択用法で用いられていることが分かる。一方の「いづれの○○」は内容用法で用いられ

表1 平安時代和文資料に見られる「いづれ」

	いづれの		いづれφ	
	選択	内容	選択	内容
竹取物語	2			
土佐日記		1	1	1
伊勢物語		1	3	
大和物語			4	
平中物語	1	2		
蜻蛉日記		2	4	
宇津保物語	4	24	39	4
落窪物語			3	
源氏物語	3	9	48	
栄花物語	3	30	15	
堤中納言物語			6	
更級日記			2	
浜松中納言物語	1	1	4	
狭衣日記	4	6	14	
夜の寝覚	1	4	2	

ることが多い。

「いづれφ」のうち、「いづれを」「いづれと」の形の例も次に挙げておく。

(6) a 花よりも人こそあだになりにけれいづれをさきに戀ひんとか見し

(伊勢物語・175)

b 一人は頭のかたを射つ。今一人は尾の方を射つ。當時いづれといふべくもあらぬに、女思わづらひて、

(大和物語・313)

(6) aは「もろくも散る桜花よりも、人の方がはかなくなっていましたね。あなたは、花と人とどちらを先に追慕すると思いましたか、人を先になど思いもしなかったでしょうね」という歌で、花と人が「いづれφ」によって選択肢として挙げられ、比較されている。(6) bは「水鳥を射たが、一人は、頭のほうを射

あてた。もう一人は、尾のほうを射あてた。それで、どちらが勝ちということもできないので、女は思いなやんで」となり、ここでも「いづれ ϕ 」を用いて二人の人物が比較、選択されている。

「いづれ」に助詞「も」が下接した「いづれも」という例も多く見られる。

(7) a いづれも、いづれも、かたち清らに、心よく、

(宇津保物語・藤原の君・1-132)

b ついたちの日は、御方 $\sim$ の有さま、いづれもいとあらまほしう、方 $\sim$
さへ集ひ給へれば、

(浜松中納言物語・巻の四・366)

(7) aは「どのお子様方も容貌美しく、気だてもよく、……」(7) bは「一月一日の日は、御婦人方の身なりが、どなたもととても好ましく」という意味になる。助詞「も」は「あれもこれも」と複数の対象について合わせて述べる働きを持っている。この場合の「いづれも」は、「いづれ」によって選択肢を比較したが「どれも優れているので優劣がつけられない」「似ているので区別できない」と、全ての選択肢をまとめ合わせて述べるように用いられたもので、選択用法の一つのバリエーションであろう。

一方の「いづれの〇〇」を見てみよう。

(8) a 「いづれの國とかや」「みゝらくのしまとなむ、いふなる」

(蜻蛉日記・142)

b 「年ごろをすぐしに、いかでかう、いづれのほどにしげりし松の末々に
か」と、いみじうあはれにうち泣かれ給ひて (夜の寝覚・巻五・362)

(8) aは亡くなった人の姿がはっきりみえる場所があるという話題について「それはどこの國かな」「みゝらくの島という所だそうだ」と会話している場面である。(8) bは「長い年月を過ごしてきて、いつの間にこんなに子供が多くなってしまったのか」としみじみ思っている、という場面である。この場合、場所の名前や時間といった内容について問うており、答えの前提となる要素(国や年数など)の集合は想定されるものの、その中から選択肢を積極的に挙げて比較しているとは考えがたい。このように、「いづれ ϕ 」が選択用法に偏って用いられるのに比べて「いづれの〇〇」は選択用法ではなく、むしろ内容用法で用いられることが多いのである。

2.3 他のイヅ形不定語

ところで「いづれ」は「イヅ」を要素として持つイヅ形不定語であるが、イヅ形不定語には、ほかにも「いづく（こ）」³⁾「いづち」「いづら」「いづかた」といった形式がある。まず、「いづかた」の例を見てみよう。

(9) a はるかに鶯の鳴きければ、「いづかたぞ」など、友なる人に

(平中物語・60)

b いづかたもいづれも、なやましさをさめまぎらはし給御けしきを、見たてまつり給に、さしならび給へる御ありさまども、いづかたのおとりまさるともなく、たゞひとつ物にかゝやきあひたる心ちして、

(浜松中納言物語・巻の五・435)

(9) a は遠くで鳴いた鶯について「どこだろう」と、方向や場所についての疑問で「いづかた」が用いられている。また (9) b は、中納言がきちんと並んで二人の姫君の容姿について「どちらが劣るでも優るでもなく、ただ混然一体となって……」という意味になる。「いづかた」はこのような選択用法でも用いられる⁴⁾。

次に、「いづく（こ）」「いづち」「いづら」の例を挙げる。

(10) a さしより給ひて、「空にたくは、いづくの煙ぞ」と、おもひ分れぬこそよけれ。

(源氏物語・鈴虫・4-78)

b 心苦しうて、「いづちかまからん」など、申て、我御方に渡り給ぬ。

(狭衣物語・巻一・53)

c 「いづら、一宮は」(と) 聞えさせ給へば、

(栄花物語・巻第十三・上-408)

(10) a が「いづく」の例で、「香炉を見せずに、香を焚く場合は、どこに焚いている煙であるか」とはっきり分からないのが良いといっている。(10) b が「いづち」の例で「どこへ参るでしょうか (いいえどこへも参りません)」という意味になる。このように「いづく（こ）」は場所、「いづち」は方向⁵⁾を問う場合に主に用いられる。また、(10) c は「どこにいらっしゃるの、一宮は」となり、「いづら」は所在を問う意味に用いられる。

このようにイヅ形不定語を概観すると、「いづく（こ）」「いづち」「いづら」に

表2 イヅ形不定語の出現状況

	いづかた	いづく	いづこ	いづち	いづら
竹取物語				1	
土佐日記					1
伊勢物語	1	2	2	1	3
大和物語	1	5	2	6	1
平中物語	1	1	1	5	
蜻蛉日記	1	4	6	1	3
落窪物語		3	12	3	3
源氏物語	55	36	41	9	15
和泉式部日記				3	
栄花物語	14	14	11	6	9
浜松中納言物語	2	11	8	5	
更級日記		2	7		1
夜の寝覚	2	10	1		3
狭衣物語	6	19	2	4	7
堤中納言物語	3	4	4	5	3

については、指し示す対象や用法が「一く(こ)」「一ち」「一ら」といった語尾によってある程度定まっているといえるだろう。

イヅ形不定語が文献資料に現れる時期について、奈良時代の『万葉集』には「いづく」の仮名書き3例、「いづち」の仮名書き2例、「いづら」の仮名書き1例が見られる⁶⁾。しかし、「いづかた」「いづこ」の確例は見られない。

平安時代の和文資料におけるイヅ形不定語の用例数を(表2)に示した。平安時代になるとイヅ形不定語が多く用いられるようになったことがわかる。

2.4 他のイヅ形不定語と「いづれ」

「いづれ」と他のイヅ形不定語の関係はどのようなものだったのだろうか。平安時代末期に成立した説話集『今昔物語集』を見てみよう。『今昔物語集』は平

易な和漢混淆文で書かれた説話集であるが、文体の相違から全体を大きく三つに分けることができる。巻第1～巻第9（以下、前半）は漢文要素が最も強く、巻第10～巻第20（以下、中盤）が和漢混淆文、巻第22以降（以下、後半）はより和文的であると言われている⁷⁾。そこで、『今昔物語集』を前・中・後半の三つの部分に分け、それぞれに見られるイヅ形不定語について考察していきたい。

「いづれ」は前・中・後半を通して用いられている。さらに詳しくみていくと、「いづれの○○」の形が、かなり多いことが分かる。

- (11) a 「君、此ノ度ビ佛ヲ見奉リ給テ、父ヲ煞（殺）セル罪ヲ滅シ不給ハズハ、
何レノ世ニカ其ノ罪ヲ滅シ給ハム。

（今昔物語集・巻第三・阿闍世王、煞父王語第廿七）

- b 一ノ僧有テ此ノ菩薩ノ所ニ来ル、何レノ所ヨリ来レリト云フ事ヲ不知
ズ。

（同・巻第十二・僧死後、舌残在山踊法花語・第卅一）

(11) a は「いつの世界に罪がなくなることがあるだろうか（いやない）」(11) b は「どこから来たのか分からない」という意味になる。このような「いづれの○○」の例が、前半は23例中16例（約7割）、中盤は24例中20例（約8割）と大半を占めている。先述したように、「いづれの○○」は奈良時代の『万葉集』では最も多く用いられた形である。『今昔物語集』前・中盤は漢文や和漢混淆文といった訓読の要素が強い部分であり、伝統的な訓法が引き続き用いられたということではないだろうか⁸⁾。

しかし、後半になると「いづれの○○」の形は16例中8例と半数に留まっているのである。そして後半では「いづれ ϕ 」が6例と多く見られる⁹⁾。

- (12) a 中將、奇異ク思テ吉ク守レバ、共ニ同乳母ノ形ニテ有リ、何レカ實ノ
乳母ナラムト云フ事ヲ不知ズ。

（今昔物語集・巻第二十七・雅通中將家在同形乳母二人語・第廿九）

- b 砂ニ隠タリケレバ、男女何レト云事ヲ不知ズ。

（同・巻第三十一・常陸国□□郡寄大死人語・第十七）

(12) a は雅通の家に同じ顔の二人の乳母がおり、「二人ともまったく同じ姿で、どちらが本物の乳母かわからない。」と不思議がっている場面である。(12) b は流れ着いた死人が「うつ伏せになって、砂に埋れていたので、男女いづれともわ

表3 『今昔物語集』におけるイツ形不定語

巻	文体	いづれ	いづかた	いづく	いづこ	いづち	いづら
前半 (1～9)	漢文	23	2	3	14		
中盤 (10～20)	和漢混交文	24	6	17	26	7	2
後半 (22～28)	和文	16	7	17	19	9	4

からなかった。」という意味になる。共に選択用法の例である。

次に、他のイツ形不定語について見ていこう。『今昔物語集』に見られるイツ形不定語の用例数を(表3)に示した。(表3)を見ると「いづち」「いづら」は中盤から後半にしか現れないことが分かる。また「いづく」「いづかた」も中盤から後半にかけての使用が多い。

このように「いづれの○○」が後半ではあまり多く用いられず、「いづれφ」が多く用いられるようになることと、イツ形不定語の使用が後半に目立つことには何らかの相関関係があるのではないだろうか。つまり、「いづれの○○」で表していた場所や方向といった領域が「いづく(こ)」「いづち」などに分担された。その結果「いづれ」は選択用法で用いられるようになった、という棲み分けが生じたと考えられるのである¹⁰⁾。

3. 「いづれ」の副詞化

3.1 任意表現

2. では「いづこ」「いづち」などのイツ系不定語が多用されるようになったのに関連して、「いづれ」が選択用法で多く用いられるようになったことを述べた。鎌倉時代以降も「いづれ」は選択用法で多く用いられる。

- (13) a されば、一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、いづれかま
さるとよく思ひくらべて、第一の事を案じ定て、その外は思ひすてて、
一事をはげむべし。 (徒然草・243)

- b 梅ト雪トタカイニ。春ヲ争テ。梅ハ雪ニ。カツタト云イ、雪ハ梅ニ勝
タト云フホトニ。(中略) 詩人モ何レヲ。イツレト。分ツヘキヤウモ。
ナイホトニ (中華若木詩抄下・一六ウ)

(13) aは『徒然草』の例で「一生のうちに、主として望ましいようなことのかで、どれがまさっているかと、よく考えくらべて、……」となる。(13) bは『中華若木詩抄』の例で、梅と雪の争いについて、詩人もどちらが勝ちか決めることができない、という意味になる。どちらも選択用法の例である。

ところで、中世になると「いづれ」は次のように用いられるようになる。

(14) a 「いづれにても、はか^へしき人にはあらじを。眞にさることあらば、馴れ顔に、もてならすらむ（こそ）、かたじけなく、心憂けれ

（狭衣物語・巻一・111）

b 軸につけ、表紙につくる事、両説なれば、いづれも難なし

（徒然草・167）

(14) aは「いづれにても」という形で、女君を連れ出した人物について、「誰かは分からないが、どうあってもひとかどの者でもあるまいに」と言っている。(14) bは「いづれも」の形で箱の刳形（くりかた）のところに、紐を付ける方法について、左側につける説と、右側につける説と二説あり「そのどちらでもさしつかえはない」という意味になる。ここでは、「いづれ」を用いて、「選択肢について一旦は比較、選択するが、結局はその選択には意味が無く、選択は任意である」ということを述べており¹¹⁾、「どれを選んでも、結果はかわらない」とか「どれでも構わない」といった意味になる。このような任意表現には助詞「も」が用いられることが多い。助詞「も」の働きの一つに「この映画は大人も子供も楽しめる」のように、対照的な語を並べて、「それらを区別しない（ほど～だ）」ということを述べるものがある。(14) aでは助詞「も」のこのような働きが用いられていると考えられる。

3.2 副詞への転成

時代が下った室町時代の資料には、「いづれ」の次のような例が見られるようになる。

(15) a 景徐ノ山水軸ノ賛ニ問翁ニ何ゾ急ニ刺舟去（中略）トアリ 三ノ句ハシカトハ不覚ソ、イツレニ此心デアツタソ （玉塵抄・二・123）

b 瑠璃石ハ出大秦国ニ（中略）大茶（ママ）ハドコニアルヤライヅレニ大西ノ方チャケナソ （同・二・241）

(15) ab は共に「いづれに」という形が用いられている。意味は (15) a は景徐の山水軸の賛をそらんじたあと、「三の句については、はっきりとは覚えていないが、おそらくこの意味だっただろう」(15) b は瑠璃石の産地である大秦国（中国西方の国）について、「どこにあるやら、おそらく大西（真西）の方だろう」となる。「いづれ」の部分は、「おそらく」「多分」のように、話し手の推量を表す副詞として用いられている。

これは 3.1 でみた「いづれ」の選択が任意であるという表現を基調として、話し手の頭の中であれこれと思い出される内容を選択肢として「どう考えても結局」と用いられたものと推測される。しかし 3.1 の任意表現の場合は「A か B か」といった選択肢がある程度明確に示されていた。しかしこの段階になると「A か B か」といった選択肢は明確ではなく、より漠然としている。つまり、選択という基調となる意味が希薄化しているのである。このような意味の希薄化を経て、「いづれ」は一語の副詞に転成して用いられるようになったのである¹²⁾。

3.3 強い確信との結びつき

3.2 では「いづれ」が「おそらく」「多分」といった意味の副詞として用いられるようになったことを述べたが、その後もさらなる変化が見られる。

(16) a あふいづれ、四五日の間にはとをらふかと云事じや

(虎明本狂言・薩摩のかみ)

b 貴公が今出ておいでの所へ、わたくし、貴公のお替りに勤にまいる所でござる。いづれびんぼう神と福の神とハ、出かわらねばならぬ。是が世の中のならひで御座ると言を、

(落嘶屠蘇喜言)

(16) a は出家が船頭に向かって「道者（道連れ）がたくさんいる」と嘘をついて舟に乗せてもらい、「道者はどこにいる」との船頭の質問に対して、「四五日の内にはきつと通るという意味だ」と答えている。(16) b では福の神が貧乏神に向かって「貧乏神と福の神は、必ず入れ替わらなければならないものだ」といっている。3.2 までの段階では「いづれに」は「おそらく」という意味で、話し手の推量を強調していたが、この段階になると「きつと」「かならず」のように、話し手のさらに強い確信と結びつくようになっている。「いづれ」の任意表現の「ど

ちらにしる」という意味は、視点を変えれば「様々な場合に同じ結論が当てはまり、例外が少ない」つまり事態の成立する確率が高いということになる。その確率の高さが取り出されて、話し手の強い確信を強調するようになったのであろう。

3.4 話し手からの事態成立への働きかけ

さらに、次のような例が多く見られるようになる。

(17) a 藤「サアいづれおれが仲人になつてやるから、二三日これで日延をし
なトわたせしかねはたしかに壱兩 (春色梅兒譽美・160)

b 「他善果に基て遷化せしとならば道に先達の師ともいふべし。又活であるときは我ために一個の徒弟なり。いづれ消息を見ずばあらじ」とて、
(雨月物語・130)

c 屋敷へ歸りまして、子細を主人へ物語り、何れお礼に参上致でござりませふ。」
(小袖曾我薊色縫・296)

(17) a は「近い将来、おれが仲人になってやる」という意味になる。(17) b は「あの法師が善行の報いで成仏したのなら、わしにとって往生の道の先達・師匠といってよい。しかし、もし生きているならば、わしにとってはさらに導くべき一人の弟子である。いづれにしても彼の様子を見とどけぬわけにはいかぬ」という意味になる。これらの例では、話し手の意志や近い将来の行為などについて確約する場面で「いづれ」が用いられている。3.3までの段階では「きつと」といった話し手の確信が述べられていたが、この段階になるとさらに進んで、事態の成立に向けて話し手から積極的に働きかけるような表現で「いづれ」が用いられるようになっているのである¹³⁾。これに関連して、近世後期以降になると、「いづれ」は過去に成立したことが明らかである事柄とは次第に結びつきにくくなっていく。既に成立している過去の事態には、その事態の成立に向けての話し手からの積極的な行為などによる働きかけといった要素の用いられる余地がないためであろう¹⁴⁾。

(17) c は世話になった相手に「近いうちにお礼に参ります」と言っている。このような別れ際の挨拶の定型的な文句としても「いづれ」が用いられるようになった。

以上みたように、「いづれ」は「どちらを選んでも結局」という任意の表現を

基調として、「おそらく〜だろう」という話し手の推量、さらには「きっと（かならず）〜だ」という話し手の強い確信を強調する副詞へと変化し、話し手の事態の成立への積極的な働きかけの表現などにも用いられるようになった。このような段階を経て、次第に現代語での様相に近づいていったと考えられる¹⁵⁾。

4. 「いづれ」とド系列指示詞

4.1 「いづれ」と「どれ」

3. では「いづれ」が室町時代ごろから急速に副詞化したことを述べた。この「いづれ」の副詞化には、ド系列指示詞の出現が大きく関わっていると考えられる。迫野 (2002) では、ド系列指示詞はイヅ形不定語の語頭「イ」音が脱落した結果発生したとされ、両者には直接的な関係があると考えられている。ド系列指示詞の最も早い例は、承徳三年 (1099 年) 点の『将門記』に「何往 トコニカユキ」と訓じられる「どこ」である。その後「どれ」「どの」「どち」「どなた」などの形が次々と見られるようになり、それまで用いられていたイヅ形不定語の領域と交替するようになった。

それでは「いづれ」の領域にはどのようなド系列指示詞が用いられるようになったのだろうか。「いづれ」と同様に「レ」語尾を持つ「どれ」は、古くは『梁塵秘抄』(1179 年頃) に次の例が見られる。

- (18) 熊野へ参るには、紀路と伊勢路のどれ近し、どれ遠 (し)、廣大慈悲の道
なれば紀路も伊勢路も遠からず (梁塵秘抄・256)

その後、室町時代になると「どれ」の例はさらに多く見られるようになる¹⁶⁾。

- (19) a 溪ニイル友タチハ、トレカ、先ツサキカラ、コヽニ住スルツ。
(湯山連句抄・60 才)

- b さあらはそれにかひませうが、代物はどれて渡しませうぞ
(粟田口) 三条の大こくやで請取ませう

(虎明本狂言・上・341・粟田口)

- c 中々あれにはどちへ行ぞ (猿引き) どれへと申事もござらぬ、方々に
旦那衆がござるに依て、よばせらるゝかたへ参る

(虎明本狂言・上・413・うつぼざる)

(18) は「紀路」と「伊勢路」のどちらが近くてどちらが遠いかを問うている。(19) a は複数の友人のうち「だれが一番早くからここに住んでいるか」という意味で、どちらの例も選択肢について問う選択用法で「どれ」が用いられている。「どれ」によって指し示される対象を見ると、(19) a は人、(19) b は場所、(19) c は方向と幅広い¹⁷⁾。このように、「どれ」も「いづれ」と同様に様々な対象について用いられた。おそらく従来の「いづれ」の領域に新しい形式の「どれ」が用いられたのであろう。

しかし、「どれ」には「いづれ」とは異なる用法も見られる。(19) b は「代金はどこで渡そうか」(19) c は「どちらへ行く」といった意味になるが、この場合、選択肢を比較する選択用法ではなく「どれ」が動作の行われる場所や動作の目的地について代名詞的に用いられている。つまり、「どれ」は「いづれ」の用法を引き継ぎつつ、新たに内容用法にも用いられるようになるなど、独自に展開したことが伺えるのである。

4.2 「いづれ」と「どの」「どち」

「いづれ」には「どれ」以外のド系列指示詞も関わっていたと考えられる。「いづれ」には「いづれの○○」という連体修飾の形が見られるが、「どれ」にはこれに対応する「どれの○○」という形は見られない。その代わりにド系列指示詞には「どの」という形が見られる。

(20) どの勢の中へかいると見つる」「川原坂の勢のなかへこそ懸いらせ給ひ候つるなれ。
(平家物語・158)

(20) は『平家物語』に見られる「どの」の最も古い例である。「源藏人はどの軍勢の中に入ると見たか」「川原坂の軍勢の中に駆け入られました。」という意味になる。ド系列指示詞が体系的に整っていく際、他の指示詞「この・その・あの」への類推から「どの」という形が作られたのだろう。

「いづれの○○」と「どの」の例を比較してみよう。

(21) a 漢家ハ何レノ王ヤラ未考 (蒙求抄三・37 オ)

b 左伝ニドノ公ノ伝ニアルヤラ不考ソ (玉塵抄二・147)

(21) a が「いづれの○○」の例で (21) b が「どの」の例である。どちらも「ど

の王／公だったか分からない」とかなり似た文脈で用いられている。このような例がみられることから「いづれの○○」の領域は「どの」に引き継がれたと考えてよいだろう。

さらに「どち」も「いづれ」や「どれ」と関連する。

(22) a トチカ背ヤラウ向ヤラウシラヌ程ニ (四河入海二・三 26 オ)

b そういふてもすまぬほどに、ここにさくの、いき大こくが有、是をいのらせて、どちへなりともいのりのつよひかたへ、大こくがおりやらふほどに、それ次第にいたさう (虎明本狂言・ねぎ山ぶし)

(22) a は「どちらが前か後か分からない」という意味になる。(22) b は喧嘩をしている禰宜と山伏の間に入った茶屋が「ここにある大黒にいのらせて、どちらへでも祈りの強いほうへ大黒が行くだろうから、それ次第にしよう」と言っている。どちらも「A か B か」という二者の選択肢からの選択（以下、二極選択とする）で「どち」が用いられている。

松本（2013）では「いづち」と「どち」の変遷についての調査を行った。その結果、「いづち」は「どちらへ（「行く」など）」のように方向について問う用法が主で、選択用法ではほとんど用いられなかったが、その後「いづち」が「どち」となり、二極選択への派生が進んだことが明らかになった。このような「どち」の用法変化もまた、他の指示詞の体系に合わせて生じたものであろう。「いづれ」が選択用法で用いられていたことは既に述べた通りだが、その中でも二極選択の領域に、新たに「どち」が用いられるようになったのだと考えられる¹⁸⁾。

以上を整理すると、「いづれ」の選択用法は「どれ」が引き継ぎ、さらに二極選択については「どち」が用いられるようになった。また「いづれの○○」の領域には「どの」が交替した¹⁹⁾。このような「いづれ」からド系列指示詞への交替の結果、「いづれ」は急速に副詞化していったと考えられる。

5. おわりに

本稿の考察の結果、次のような点が明らかになった。

「いづれ」は奈良時代には「いづれの○○」の形で広範囲の対象についての内容用法で用いられた。平安時代になると他のイツ形不定語「いづく（こ）」「いづ

ち」「いつかた」が用いられるようになり、「いづれ」は複数の事物を比較し選択する選択用法に偏るようになる。

さらに選択用法を基本とした「いづれも」「いづれに（し）ても」といった形で「どの選択肢を選んでも結果に変わりはない」という任意の表現で用いられるようになる。そこから「いづれ」従来の選択の意味は希薄化し、「おそらく～だろう」という話し手の推量を強調する副詞となった。さらには「どちらにしろ」という事態が成立する可能性の高さが取り出され、「きっと」「かならず」という話し手のより強い確信を強調する用法へと変化していった。また、「近いうちに」という将来の見通しを確約する副詞でも用いられるようになっていき、現代での様相へと連なると考えられる。

この「いづれ」の副詞化には鎌倉時代以降用いられるようになったド系列指示詞が関連している。ド系列指示詞の出現により、「いづれ」の選択用法の領域は「どれ」、その中でも二極選択の場合は「どち」、「いづれの○○」で表していた部分は「どの」と交替していく。このように「いづれ」は従来の領域をド系列指示詞と交替した結果、副詞化していったと推測される。

「いづれ」の歴史的変遷には、他のイズ形不定語やド系列指示詞との棲み分けが深く関わっている。しかし、本稿の調査から「いづれ」の用法に偏りがあること、「いづれ」に対応する「どれ」は場所や方向についての問いにも用いられること、「いづれ」の領域を「どれ」「どの」「どち」という複数のド系列指示詞が分担していることなどが明らかとなった。これらの現象はイズ形不定語とド系列指示詞が必ずしも一対一で対応しているわけではなく、不定語の体系的な変化そのものが、かなり複雑であることを示唆している。この問題については迫野(2002)などの研究があり、イズ形不定語は指示詞の定称(コ・ソ・アの語形)からずれることから、「独自に語彙的であった(迫野 2002)」と指摘されている。イズ形不定語からド系列指示詞へという問題について、より詳細な記述をふまえた上で、個々の形式についての考察が必要だと考えられるが十分ではない。今後の課題としたい。

用例出典

万葉集・狂言記……『新日本古典文学大系』岩波書店

竹取物語・土佐日記・伊勢物語・大和物語・平中物語・蜻蛉日記・落窪物語・枕草子・源氏物語・栄花物語・堤中納言物語・更級日記・浜松中納言物語・狭衣物語・夜の寝覚・今昔物語集・将門記・保元物語・平家物語（覚一本）・徒然草・梁塵秘抄・春色辰巳園・春色梅兒譽美・小袖曾我薊色縫・雨月物語……『日本古典文学大系』岩波書店

将門記・宇津保物語……『新編日本古典文学全集』小学館

応永二七年本論語抄……『抄物大系』勉誠社

四河入海・玉塵抄……『抄物大系別巻』勉誠社

中華若木詩抄……『中華若木詩抄』勉誠社文庫二〇

毛詩抄・蒙求抄……『抄物資料集成』清文堂

湯山連句抄……『湯山聯句抄本文と総索引』清文堂

詩学大成抄……『詩学大成抄の国語学的研究』清文堂

大淵代抄・巨海代抄……『禅門抄物叢刊』汲古書院

天草版平家物語……『天草版平家物語語彙用例総索引』勉誠出版

邦訳日葡辞書……『邦訳日葡辞書』岩波書店

エソポのハプラス……『エソポのハプラス 本文と総索引』清文堂

ロドリゲス日本大文典……『ロドリゲス日本大文典』三省堂

大蔵流虎明本……『大蔵流虎明本狂言集の研究』表現社

大蔵流虎寛本……『大蔵流虎寛本能狂言』岩波書店

落嘶屠蘇喜言・初音草嘶大鑑・東海道滑稽譚……『嘶本大系』東京堂出版

註

- 1) 表記については仮名書きの他に「何」「何レ」「孰レ」などの漢字表記が見られる。本稿では漢字表記で「イヅレ」と訓じたことが確定できない例については参考に留め、「イヅレ」とよんだ可能性が高い例を中心に考察している。また、現代語では仮名書きの場合「いづれ」と表記されることが多い。一方、古代語では歴史的仮名遣いによって「いづれ」と表記される。本稿では考察の対象が古代語であるため、以降、これらの表記を代表して「いづれ」とする。
- 2) 内容用法、選択用法という名称については、阪倉（1993）の「内容的問い」「選択的問い」という記述を参考にしている。
- 3) 「いづく」と「いづこ」はともに場所を表す。「いづく」は「いづこ」の古形であ

るとされている。イズ形不定語全体の様相を知るためには「いづく」と「いづこ」を区別して考察する必要があるが、本稿では一旦同じ形式とみなしておく。

- 4) 「いづかた」は選択用法で用いられるなど「いづれ」に用法が類似している部分があるが、これは「いづかた」が「いづれの方」の約かと考えられるためであろうか。「いづかた」と「いづれ」の関係についてはさらに考察する必要がある。
- 5) 「いづち」はとりわけ「行く」「去る」といった移動性の動作の目的を表すことが多い（松本 2013）
- 6) このほかに「いづく」「いづち」「いづら」と訓じた可能性のある例はある。
- 7) 『今昔物語集』の文体については峰岸（1959）などによる。
- 8) 築島（1963）によると平安時代の漢文訓読には「いづれ」「いづく」の使用が目立っていたことが指摘されている。あるいは『今昔物語集』の前・中盤も平安時代の漢文訓読法に則って「いづれの○○」の形が多く用いられているとも考えられる。
- 9) 残りは「いづれも」2例で、これらも選択用法で用いられていた。
 - ・ 此ノ二人ノ男ノ魂何レモ不劣ヅトハ云ヒ乍ラ、
（今昔物語集・巻第二十七・通鈴鹿山三人入宿不知堂語第 四）
- 10) イズ形不定語のうち「いづく（こ）」「いづち」は、動作が行われたり、事物が存在する場所や方向について、代名詞的に示すことが多いようである。そして「どこが良いか」「どちらが良いか」といった選択用法で用いられることが少ない。このことから、場所や方向についての代名詞的用法を「いづく（こ）」、選択用法を「いづれ」というように用法の棲み分けが行われていた可能性も考えられる。今後明らかにしていきたい。
- 11) このような不定語と助詞「も」の組み合わせによって任意表現がなされる例として松本（2011）では「いかにも」について考察した。
- 12) 室町時代の抄物資料をいくつか調査したところ、『蒙求抄』（1534 年）の「いづれ」15 例中 4 例、『毛詩抄』（1539 年）の 8 例中 3 例、『玉塵抄』（1563 年）では、第二巻を抽出調査したが、「いづれ」とある 11 例のうち 10 例と、多くがこのような「いづれに」の形で用いられていた。
- 13) 3.2 でみた「おそらく」「多分」という意味の段階では、後続する事柄の成立の真偽が不確定であり、最も関心が高かった。つまり命題となる対象について描写する「対象面」が強い副詞であったといえよう。しかし「きっと」「かならず」という段階になると話し手の強い確信という態度や気分を表すことに重心が置かれてくる。さらには話し手からの事態に対しての積極的な働きかけとむすびつくようになると、「いづれ」は対象を描写する側面よりも、対象についての話し手からの「気分、態度」を表す「作用面」がより強い副詞となっていったということではな

いだろうか。ここでいう「対象面」「作用面」については工藤(2000)を参考にしている。

- 14) 過去の事柄との共起については佐治(1986)での「必ず」「きっと」「絶対に」「どうしても」の四語についての考察を参考にしている。現代語ではこれらの副詞のうち「絶対に」を除く三語は過去の事実の文には用いられないという調査結果から、これらの語が話し手の主観を表すものであるとされている。
- 15) 本稿では紙幅の関係上詳しく触れられなかったが、「いづれ」の副詞化の方向は一つではなく、次のような展開もあったと考えられる。

・御子どもは、いづれともなく、人がらめやすく、世に用ゐられて、心地よげにものし給ひしを、こよなうしづまりて、三位中將なども、世を思ひしづめるさま、こよなし。
(源氏物語・賢木・1-345)

(左大臣のご子息たちは、どなたもみなそろって人柄が好ましく、世に重く用いられて)

・参り集りて、物騒がしう、女房など、候ふ限りまいり集りたる、かたち・有様・衣の色・擣目・重なりもなべてならず、いづれともなくめでたし。

(狭衣物語・282)

((集まってきた上達部や君達、女房など大勢の人について)衣装の色目、擣(う)ち目、重なり具合も並々でなく、どの人とも言えずばらしい。)

どちらも「いづれともなく」というひとまとまりの句で「いづれ」が用いられている。この場合「選択できない」という選択を否定する意味で、下に続く「全てみな〇〇だ」と対象の状態(素晴らしいといった程度を表すことが多い)が一様であることを強調している。ここから連続して、江戸時代には次のような例も見られる。

・出びたいに頬ハまんぢうのやうにふくれやり、おとがひ鳩むね、いづれ七道具そろふたる女、勝手にミへしを、定て下女なるべしと思ひ、
(初音草嘶大鑑)

・ハテサ、道中で礼に出るなじみの老蘭を直に茶屋へひきあげの、妓婦いづれお春におふじ、男げいしやハ林蔵でもよんで、
(東海道中滑稽譚)

出びたい、まんじゅうのような頬、下あごや鳩胸など、不美人の要素を七つ道具に例え、「それらが全て揃っている」という意味で「いづれ」が用いられている。また、茶屋の妓婦を「お春、おふじ、林蔵……」と列挙する場合に「いづれ」が用いられる。先ほど見た「一様に」という意味から「選択肢が色々ある。そろっている。」といった意味の副詞としても用いられるようになったのではないか。

- 16) 「どれも」の形も見られる。この場合も選択用法で用いられることが多い。

・二人ドレモミメヨイナリスガタウツクシカツタソ
(玉塵抄二・444)

- ・武帝ノヲソウミタトアツテホメサシムタソドレモ名人ナソ (同・70)
- 17) 「時間」について「どれ」で指す例は本稿の調査ではほとんど見られなかった。唯一次の例が「時間」を指しているかと見られる。
 - ・次ハヤドリトヨムソ 舎(ホシヤドル) 竜集(ホシヤトル) 竜シ次ル 次ルト
年事ノ下ニカクハワノ年カドレニヤトルト云心ソ (玉塵抄二・256・時間)
- 18) 「どれ」も「いづれ」の用法を引き継ぎ、二極選択で用いられていた。
 - ・退ト避ト似タソドレガ本ヤラソ (玉塵抄二・209)
- 19) 用法についても「いづれの」と同様「どの」は室町時代には選択用法で用いることは少ないようである。しかし、「どの〇〇も(とも)」といった形で用いられる場合には選択用法で用いられることもあるようである。今後さらなる考察が必要である。

参考文献

- 荻野千砂子(2003a)「指示詞から人称詞へー「～ナタ」系語の変遷ー」『語文研究』95
- 奥津敬一郎(1984)「不定詞の意味と文法ー「ドッチ」についてー」『都大論究』21(『拾遺 日本語文法』ひつじ書房(一九九六)に再録)
- (1985)「統・不定詞の意味と文法」『人文学報』173(『拾遺 日本語文法』ひつじ書房(一九九六)に再録)
- 工藤 浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店、第3章
- 阪倉篤義(1993)『日本語表現の流れ』岩波書店
- 迫野虔徳(2002)「指示詞におけるコソアド体系の整備」『語文研究』94
- 佐治圭三(1986)「「必ず」の共起の条件 —「きっと」「絶対に」「どうしても」との対比において—」『同志社女子大学学術研究年報』37-4
- 築島 裕(1963)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
- 松本朋子(2011)「「いかにも」の歴史的変遷」『日本語・日本文化』37
- (2013)「「いづち」から「どち」へ」『和漢語文研究』11
- 峰岸 明(1959)「今昔物語集に於ける変体漢文の影響について一問の用法をめぐる一」『国語学』36
- 柳田征司(1991)「『ドウ』(如何)の成立」『室町時代語資料による基本語詞の研究』武蔵野書院
- 山口仲美(1984)『平安文学の文体の研究』明治書院
- 李 長波(2002)『日本語指示体系の歴史』京都大学学術出版会

附記：本稿は2009年3月に京都府立大学文学研究科に提出した博士論文の一部を大幅に改稿し、平成25年度国中文学会（2013年12月14日於京都府立大学）において発表した内容をまとめたものである。執筆に際して、学内外の多くの先生方に教示を賜りました。記して深謝申し上げます。

〈キーワード〉不定語、いづれ、副詞化、選択用法

The Historical Change of “Idure”

Tomoko MATSUMOTO

In the Nara period, ‘idure’ was used in the form of ‘idureno xx.’ In the Heian period, the forms of ‘iduku(iduko), “iduchi”, idukata’ began to be used, and “idure” tended to be used when they compared and selected something.

Furthermore, “idure” came to be used to mean, “Whichever you select, the result will be the same.” So, the selective aspect of the meaning of ‘idure’ diluted and it became an adverb which emphasized speaker’s guess. Moreover, it came to mean ‘certainly’, which emphasized speaker’s strong certainty. Also, it came to mean ‘in the near future’, which promised the future prospects positively to the conversation partner.

The change of ‘idure’ into an adverb is closely related to ‘do-’ series demonstratives which began to be used in the Kamakura period. Then ‘idure’ was replaced by ‘dore.’ When they ask A or B, it was replaced by ‘dochi.’ ‘Idureno xx’ was replaced by ‘dono xx.’ In this way, ‘idure’ changed into an adverb as the result of the replacement of the previous parts by ‘do-’ series demonstratives